

## 開封の歴史と猶太人（ユダヤ人）

著者	久保田 和男
雑誌名	長野工業高等専門学校紀要
巻	50
ページ	1-7
発行年	2016-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1051/00000970/">http://id.nii.ac.jp/1051/00000970/</a>



## 開封の歴史と猶太人（ユダヤ人）\*

久保田和男<sup>\*1</sup>

The history Kaifengfu and Jew people

KUBOTA Kazuo

This paper described the history of Kaifengfu and Jew people. North Sung (北宋) age, Jews arrived at China from the west and lived at Kaifengfu (開封府). Up to now for about about 1000 years, they keep living in eastern area of this city. They were the city people who made the commerce a bread-and-butter job. In Ming era (明代), Kaifengfu prospered as a local city in particular. A Jewish community also prospered during the time. In 1644, a deluge of the Yellow River has destroyed their synagogue. it was possible to make it revive by the power of the community. Economy of Kaifengfu was depression in the modern times (after 1842). Jewish community also declined at the same time, and religious consciousness was being also lost.

キーワード：猶太（ユダヤ）人，開封府，鉄屑楼，シナゴーク（清真寺），道経（モーセ五書）

## はじめに

河南省開封市は、大運河と黄河の交点にほど近いことから交通の要衝となり、北宋時代（960～1127）に都城として世界的な大都市となったことで知られる。その後も河南地方の中心都市として栄えた。現在の開封城の規模は明清時代の開封のものであり、ほぼ北宋時代の内城のものである。今日も城壁を残す都市であり、城内には清代末期の民家が建ち並ぶ。近年、日本の建築史研究グループがこれに注目し現地調査を実施している。その対象となった地区は回族が多くすむ城内東南部である<sup>1)</sup>。そこには東大寺という中原地区最大のモスクがあり日常的な宗教活動が行われている。かつてはその北に、シナゴーク（古刹清真寺・清真寺・挑筋教礼拝寺などと名称は変遷）を中心とするユダヤ人街があった。現在、南教経胡同（20世紀初頭までには挑筋教胡同）と称せられるかつてのシナゴーク界限には、わずかにユダヤ人末裔一家族が暮らすだけになっている。

19世紀半ばまである程度の規模（数千人）をもっていた開封のユダヤ人共同体は、明代にマテオリ

ッチによって西洋世界に報告されてより注目され、少なからず報告書や専門研究がある。日本でも、数年前ドイツ文学からディアスポラ・ユダヤ人の研究を専門にされている小岸昭氏がその独特の問題意識から労作を上梓されている〔小岸 2007〕。

ただし、小岸氏の視点は、ディアスポラ（離散）・ユダヤ人の運命に対する世界的な探求のなかの一部として開封ユダヤ人社会を見ている。一方、私の研究関心は開封史である。開封ユダヤ人の盛衰はこの都市空間の歴史を反映したものといえる。開封ユダヤ人の社会のあり方の変化、あるいは中国や開封社会との関わりを考えることによって、開封史の側面を明らかにすることが本論の狙いの一つである。小岸氏が参照されていない中国語によって書かれている開封ユダヤ人の研究についての研究も少なからず存在する。やはり中国の研究においてもユダヤ研究の一環としてのものを中心であり、開封史の観点から論じられたものは少ない。本論の問題意識はその点に存する。

## 1. 開封ユダヤ人社会と中国伝統社会

## 1-1 開封へのユダヤ人定住

開封城内を汴河（大運河）が貫流している。そして開封の西において大運河は黄河に合流していた。

\*2015年10月3日早稲田大学史学会全体会公開シンポジウム「世界史のなかのユダヤ人」で報告

\*1 一般科教授

原稿受付 2016年5月20日

また山東半島などに至る運河も城内に引き込まれており交通至便の地であった。財政・経済・軍事の中央集権が実現した北宋王朝の首都にふさわしい都城といえる。商品経済が発展したその繁栄のイメージは『東京夢華録』や『清明上河図』（北京故宮博物館蔵、石渠宝笈三篇所収）によって我々に伝えられている。当時人口 140 万を数え、世界最大の都市であった。

金では陪都であり一時的には首都ともなった。元・明・清を通じて河南省の中心都市であった。元によって新しい大運河が開通し大運河ルートから外れたが、明朝初期には首都の候補ともされた。太祖の第 5 子が周王として封建され、金の宮殿跡に周王府が建設されている。依然として交通の要衝であった開封は<sup>2)</sup>、北京・南京に次ぐ中国第三の都会と考えられていたという。演劇文化・飲食文化が栄えた地方の大都市であった<sup>3)</sup>。

宋代以前にも中国でユダヤ人が商業活動をしていたという記録は存在する<sup>4)</sup>が、コミュニティを作って居住したのはやはり宋代にはじまるようだ。「重建清真寺記」（弘治碑）によれば、「七十氏族」が「天竺」から宋にいたり、「西洋布」を貢物として皇帝に差し出したという。皇帝は、「我が中華に帰属せよ。信仰・習俗をまもって開封にとどまれ」と命じた<sup>5)</sup>。これより開封にすむようになったということである。この皇帝が北宋三代目の真宗であると考えられる中国人学者は多い<sup>6)</sup>。根拠とされる史料では、ユダヤ人と考えられている一行は、「西天」より、陸上交通路を通じて 7 年かかって開封に到達したという<sup>7)</sup>。開封の街路を描いた『清明上河図』には、ラクダの姿が描かれており西方との交流が示唆されている。また『東京夢華録』には「祆廟」（ゾロアスター教寺院）が大内至近にあったことも記されており参考になる<sup>8)</sup>。

正史をはじめとする漢人読書人によって編まれた漢文史料には、最大で 3000~4000 人に及んだといわれる開封ユダヤ人社会についての記録はほとんど登場してこない<sup>9)</sup>。宋代以降、開封に定住したと考えられるが、漢人読書人から関心が払われることはなかったといえる。これは唐宋変革の一つの側面を考える上での注目すべき問題ともいえる。もし唐代長安のような胡漢の混在を前提とした坊牆制空間にユダヤ人が居していれば、「胡」に分類される一つの集団として記録されたであろう。唐末に起源をもつ新儒学では、東アジア社会を華夷思想によって考えるようになる。「華」に入れば、「一視同仁」思想により民族的区別は行われぬのが基本である。した

がって首都開封には胡漢混住を前提とした坊牆制による都市構造はなかった。この問題には唐宋間の儒教思想の変化が関係しているというのが、現在のところの私見である。

基本的に華夷思想を原則としない元朝支配下においては、モンゴル・色目人・漢人・南人という民族に基づく階級の原理が働く。ユダヤ人も色目人の一つの分類として法制資料に現れる<sup>10)</sup>。彼らを表す「竹忽」「朮忽」「主吾」などである<sup>11)</sup>。が、明代の「弘治碑」では、「一視同仁」という言葉が用いられ、「華」に帰属することとなったユダヤ人が明代においてことさら特別視されなかったことが語られている。宋代と同様、「華」として認識されたためか、開封に関する明人の著作にはユダヤ人はあまり登場してこない<sup>12)</sup>。明代には、開封のユダヤ人共同体から科挙及第者が輩出した。すなわち伝統社会における読書人たちにとっては「華」の一部なのである。彼らの中の読書人みずから編んだ石碑や族譜により、また彼らに強い関心をもった欧米社会からの訪問者によって開封ユダヤ人の姿は明らかとなる。

## 1-2 イエズス会宣教師と開封ユダヤ人情報

明代の終わり頃、中国布教を志したイエズス会宣教師マテオ＝リッチが北京で活動していた。1605、彼を訪ねた開封ユダヤ人の男性（彼は会試受験のため上京していた。）がいた<sup>13)</sup>。風貌は漢人とはかなり異なっていたという。イエズス会の宣教師が一神教を信じていると聞き、同じ宗教の信徒であると考えたようである。リッチも最初は彼をキリスト教徒（ネストリウス派）であると誤解していたようであるが、ヘブライ語で『旧約聖書』の一節を暗唱したことで、かれが古来中国にやってきたユダヤ教徒の末裔であることを確信する。偶像崇拜の忌避、幼児への割礼、豚を食べないことなど様々な戒律を良く守っているを知り驚愕するのである。

マテオリッチによって記録された問答によって、明代末期の開封ユダヤ人について以下のようなことを知ることができる。

- ・「ジュデーア（ユダヤ）」という呼び方を知らず、「イブラエーレ」と自称していたこと。
- ・10～12 家族であったこと。
- ・壮麗なシナゴークを再建したばかりであること。
- ・シナゴークと「モーセ五書」（羊皮紙）を大切にしていること。
- ・開封に住み着いて 500 年から 600 年を経ていること。
- ・イエス＝キリストについては知らず、これから救

世主が出現すると信じていたこと。

・開封以外にも、杭州にシナゴークがあり開封以上の人数のユダヤ人がいること。

・その他の地域にも居住しているユダヤ人はいるが、シナゴークがなく共同体が衰退していること。

この三年後、リッチは、二人の中国人キリスト教信者を開封に派遣し改宗可能かどうか調査させた。そこで、彼らは古い書式（句読点が無い）のヘブライ語の『旧約聖書・モーセ五書』（開封では『道経』と呼ぶ。以下これに従う）を実見したという。またリッチのラビ就任を要請されたらしい。

その後、数多くのイエズス会関係者が開封を訪れている。彼らの目的は、『旧約聖書』の古いヘブライ語テキストの入手であり、ユダヤ人の改宗であったようであるがそれには成功していない。ただし、今日彼らの記録はこの社会の貴重な資料となっている。

- ① 1613 に訪問 ジューリオ・アレニ<sup>14)</sup>
- ② 1628-1642 滞在 ロドリゲス・デ・フォグレード（開封で洪水により溺死）
- ③ 1660?訪問 クリスティアン・エンリケス
- ④ 1698・1701・1704・1723 四度訪問 ジャン・パウ・ゴザニ
- ⑤ 1722 訪問 ジャン・ドマンデュ
- ⑥ 1723 訪問 アントワーン・ゴービル  
（1724 雍正帝が、キリスト教禁教令を發布。宣教師たちが追放される。）

この後、アヘン戦争後になるまで、西洋人の開封訪問の途は断たれる。1850年代以降、プロテスタントの諸教会や、あらたに形成された上海のユダヤ人社会からの開封へのアプローチが行われる。

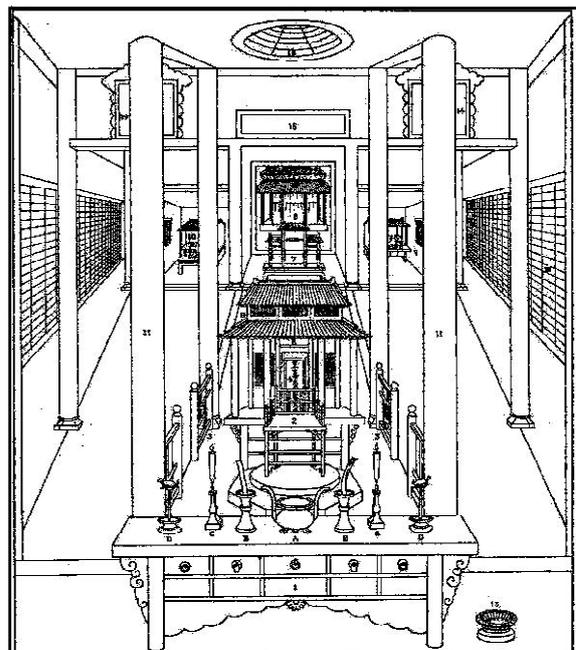
リッチの報告にあるように、開封の人々はユダヤ人を「筋を食べない人々」とよんでいたという<sup>15)</sup>。ユダヤ教は「挑筋教」「刀筋教」と呼ばれていた。これはユダヤ教における宗教的な食習慣に由来する。屠殺した動物の筋をぬいてから調理することを奇異に思った漢人がわからの呼び名である。この呼び方は『如夢録』中州古籍出版社 1984、45 頁にも記録されている。自分達は、「一賜楽業」（イスラエル）人と自称していた<sup>16)</sup>。「猶太人」という呼称は近代になってからの外来語に由来する<sup>17)</sup>。

「重建清清寺記」（弘治2年碑）には「我が中華に帰属せよ。信仰・習俗を守りながら開封にとどまれ」<sup>18)</sup>と北宋の皇帝に命じられたことが記されている。これを文字通りとれば、中国伝統社会に帰属す

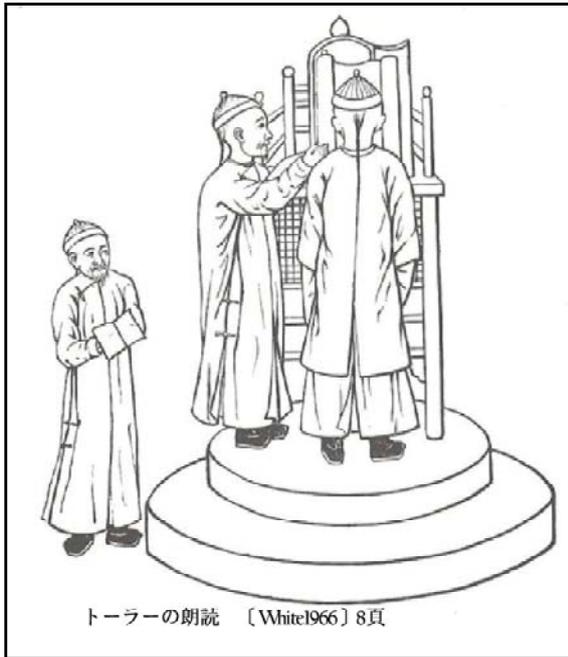
ると同時に、ユダヤ教の信仰・習慣を維持しなさい、ということである。実際に開封のユダヤ人はヘブライ語の聖書を朗唱しながら、一方で儒教の学習に励み、多くのものが科挙に挑戦し進士に至ったものも現れた。4枚の碑文は漢文で書かれており一つをのぞきユダヤ人の読書人が起草している。ユダヤ教の教義を記す部分では、儒教の経典が引用され、教義を儒教の教えに近づけて解釈し紹介している。これは、中国伝統社会の一員としての文化的な立場を示していることを物語っているのではないか。なお、明代・清代のシナゴークを訪れたイエズス会宣教師の証言によれば、それぞれ、皇帝万歳牌<sup>19)</sup>が目立つところに置かれていたという（下図を参照）。これは、皇帝政府への従属への意志と政府側からの承認を示唆している。これは、宋代の皇帝とのやりとりと変化はないといえる。

## 2.シナゴーク（清真寺）・モーセ五書（道経）を修復する共同体

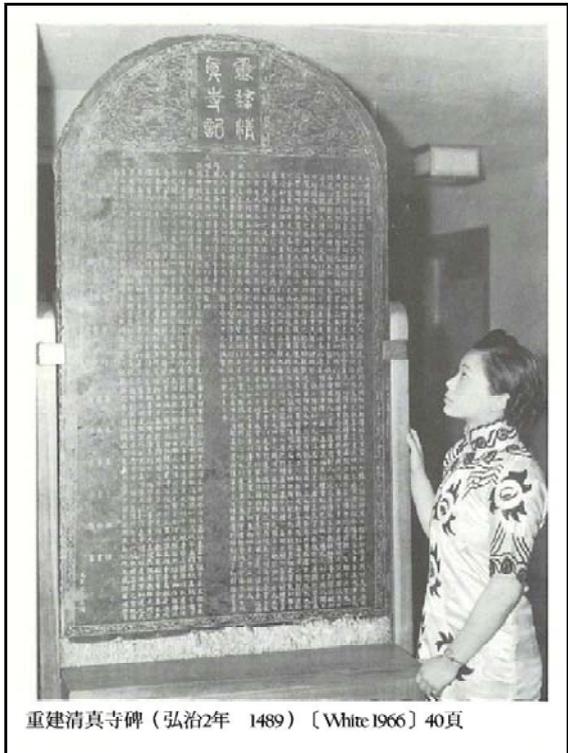
開封は黄河に近く、歴史上数度、大洪水に襲われている。洪水によって土砂が堆積した後、都市が再建されることが繰り返されており、現在の開封市の下には、北宋の開封や明代の開封が埋もれているのである。北宋の地表は現在の地表の7～10メートル下にある。ただし、城壁や街路、城門の位置は基本的には北宋時代のもので踏襲されている。このような現象を「城摺城」「街摺街」「門摺門」と開封の



清朝時代のシナゴークの内部。原画は、1722年に開封を訪れた Pree Jean Domeng SJの描いたもの。〔White1966〕6頁  
中央の椅子がモーセの座で、祭儀の際にはトーラーが置かれラビによって朗読された。その後ろの祭壇に皇帝万歳牌がみえる。



トーラーの朗読 【White1966】8頁



重建清真寺碑（弘治2年 1489）【White 1966】40頁

人たちは称しており、名物と考えているようだ。開封のシナゴークも同じ場所（土市子→土街）に修築され続け清朝末期を迎えている。

清代の清真寺の図は、1722年に開封を訪れたジャン・ドマンデュの報告書に残されている。内部には、『道経』（『モーセ五書』）が入られた経龕が丁重に祀られており、毎週安息日にその読誦がおこなわれ、1年で全部を読み終わることになっていた。シナゴークは、イエルサレムの方角が意識されて立っており、東門が正門であった。これはお隣のモスク東大寺（メッカの方角）と同様であり、基本的な構

造も類似していたようだ。

シナゴークの境内にあったといわれる、4枚の石碑の文章は漢文で書かれており、ユダヤ人読書人の面目躍如である。特に最初の3碑は、自分たちの共同体の活動・子弟教育の場であるシナゴークを再建した財力と団結力を示すものとなっている。碑文の内康熙2年のものは、現在行方不明であるが<sup>20)</sup>、他は開封市博物館の四階「猶太歴史文化陳列室」に保管されている。

- ①「重建清真寺記」明 弘治2年（1489）→弘治碑
- ②「尊崇道経寺記」明 正徳7（1512）→正徳碑<sup>21)</sup>
- ③「重建清真寺記（祠堂述古碑記）」清 康熙2年（1663）→康熙2年碑
- ④「清真寺趙氏牌坊並開基源流序」清 康熙18年（1679）

「弘治碑」によると宋孝宗隆興元年（1163）に最初のシナゴーク（清真寺）が立てられたという。開封はこの時点では金に占領されて久しいが、居住を許可した宋の皇帝への忠誠を示していると考えられる。あるいは明代の正統論によって記年したのであろう。

シナゴークは至元16年（1279）に再建される。その場所は、「土市字（子）」の東南であったという（弘治碑）。この場所は現在知られている清真寺の遺址の場所とも一致している。ユダヤ人たちは、土市子<sup>22)</sup>という繁華街に近いところに集住していたことがわかり、かれらの経済力が商業によるものであったことが想定される。高地価の街区に用地を準備するだけの資金力を得ていたことが知られる。

北宋時代、土市子には徽宗皇帝もお忍びで利用した<sup>23)</sup>とされる「鉄屑楼酒店」<sup>24)</sup>という酒肆があった。「鉄屑」とは料亭としては奇妙な名前である。これと音通する「迭屑」という言葉があり、『大元至元辨偽録』には「迭屑人奉彌失訶」<sup>25)</sup>とあることから、民族名あるいは集団名を表すものであるらしい。この民族は「彌失訶」を奉っていたというが、「彌失訶」とはメシアの音訳である<sup>26)</sup>。とすると、迭屑人とは断然ユダヤ=キリスト教系の信徒集団を表現した漢語であり、開封土市子には、のち金代にシナゴークが建立されたわけであるから、鉄屑楼が、開封に住み着いたユダヤ教徒と関係がある建物であったと考えることは説得力がある<sup>27)</sup>。

開封の城内の都市構造を考える中でも以上のように



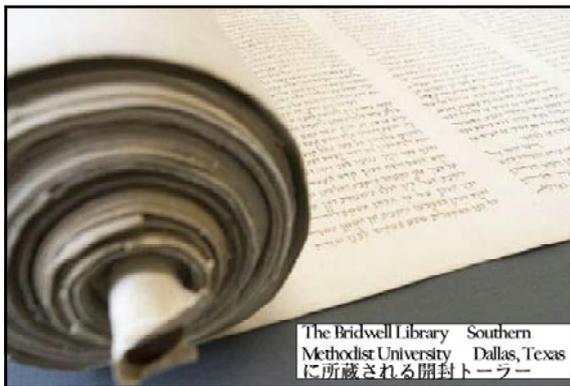
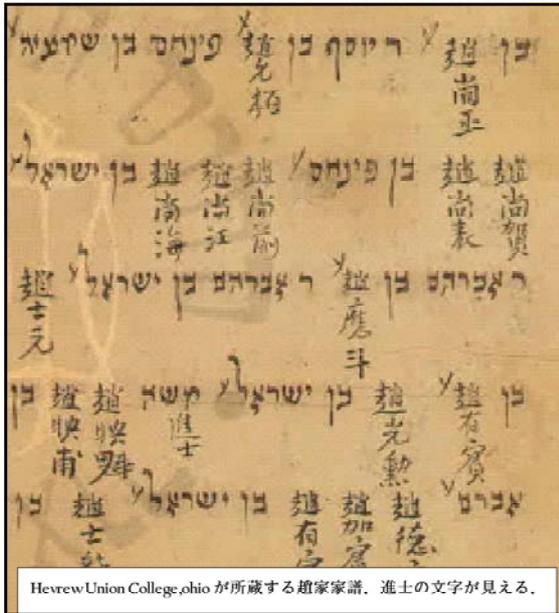
な問題は興味深い。北宋前半においては禁軍軍営が多くを面積を占めたことが明らかになっている。それは、だいたい南北中軸線（御街）の西部におかれていた。したがって東部が商用地となっていた。宋代において重要性を増した財政・経済を司る官庁のいくつかも中軸線東部に置かれていた。なによりも「土市子」とはいかにも商用地に由来する地名である。『東京夢華録』によれば「土市子」の周囲に、市に関連する地名が頻出している。そのような商業地区にユダヤ人たちは住み着いたのである。今は順河回族自治区となっており、回族が集まって住んでいる市区である<sup>29)</sup>。

最初の碑文は、明代の半ば弘治2年（1489）に作られたものである。天順5年（1461）の洪水によって倒壊したシナゴグをユダヤ人共同体が私財を投じて再建したことの記録である。碑文では、「李，俺，艾，高，穆，趙，金，周，張，石，黄，李，聶，金，張，左，白七十姓等」が北宋の時に開封に至ったと記録するが、元までは漢字姓を名乗っておらず、明代に改姓が命じられたのだともいわれている<sup>29)</sup>。また、この記録によってわかることは、私財を投じた富裕なユダヤ人の多くが科挙官僚として中国の様々な地方に赴任していたことである。注目されることは、『道経』（モーセ五書）を寧波から持ってきて復元したという記述である。すなわち寧波にもユダヤ人の共同体、シナゴグがあったことがわかる。リッチの聞き取りによると、杭州にもシナゴ

グがあったことが知られる<sup>31)</sup>。正徳碑では、正徳7年（1512）、揚州の金姓の人物から一部の『道経』をもらい受けたことが記されている<sup>32)</sup>。

これらの都市は、北宋の滅亡によって宋朝が南渡する際に、高宗皇帝がそれぞれ一時滞在した江南の都市群である<sup>33)</sup>。最終的には杭州に定都している。政府の南渡に従った、開封都人は相当の数に上ったと考えられる。すなわち、江南都市のユダヤ人たちは、北宋時代に開封に定住した人々が宋室の南渡に従ったものなのである。そろって交通上の要衝であることも注目される。ただし開封にも相当数が残存し、先述したように金朝の半ばにシナゴグを建立し共同体が確立したのである。

明朝が瓦解する原因となった李自成の乱（1644-45）が発生したとき、開封は反乱軍によって包囲される。六ヶ月に及ぶ防衛戦のなかで、万策尽きた明軍は、黄河の堤防を切り反乱軍を洪水によって撃退しようとする。この人工的な洪水により開封が大きな被害を被り、厚さ2-3メートルの黄土が堆積することになった。多くの住民が犠牲となつたとされ、開封城内の被害も甚大であった。シナゴグも倒壊し、『道経』（モーセ五書）のほとんどが水没してしまう。しかしながら順治10年（1653）から始まる工事によって、開封ユダヤ人社会はシナゴグを復元することができた。共同体にそれだけ



の力があつたのである。この復興事業の記録が「康熙 2 年碑」（1663）である。完成した新しい清真寺の規模は、これまでのものよりも大きく立派であつたという。参画したユダヤ人の姓名とそれぞれが貢献した事業が列挙される。シナゴグの建造物だけではなく、流されてしまった『道経』13部を修復することに成功する。

大洪水で人的にも相当の損害があつたが、それにもかかわらず、シナゴグや經典の復原が実現した明清交代期はおそらく開封ユダヤ人共同体の最盛期であると考えられる。この時期、多くのイエズス会の宣教師が開封を訪れ、古いバージョンである開封の『旧約聖書』（道経 モーセ五書）を購入しようとしたが、開封のユダヤ人たちは經典を売ることはなかった。これはシナゴグの運営や信仰生活がユダヤ共同体によってしっかり行われていたということを表していよう。科挙に合格できるような読書人を数多く生み出したユダヤ人共同体には富裕なものが多かつたと考えられる。数千人が開封という商業都市に居住していることから、かれらは商工業を生業としていたことがわかる。とすると開封の都市経

済状況が良好であつたことが彼らの共同体を存続させたのである。

彼らは、ユダヤ教の教えを儒教の經典で置き換えて解釈する一節を石碑に刻んでいるが、一方では儒教を学ぶ読書人の集団でもあつた。勤勉なユダヤ人らしい。その成功は一族から科挙合格者を出すことだつた<sup>34)</sup>。ヘブライ語の学習の代わりにエリート層が儒教の学習をすることで、ユダヤ教から離れるという現象が発生した。これはリッチを訪ねた開封ユダヤ人がリッチの前で述懐したことでもある<sup>35)</sup>。これが開封のユダヤ人社会崩壊の一つの原因ともなつてしまつたと考えられる。官僚生活をおくる者たちは開封から離れてゆく。非エリートのユダヤ人が開封に残ることになる道理である。康熙 2 年碑の記述から知れることは、外地で官僚生活を送る者たちが故郷の信仰共同体における危機を団結して救う姿である。しかし、外地で生活するエリート層は信仰生活に不可欠のラビによる教導や共同体によってのみ行うことができる宗教行事<sup>36)</sup>への参加が不可能となり、次第に現地社会に同化してゆく結果となつたのである<sup>37)</sup>。

### 3. 近代中国と開封ユダヤ人共同体の変化

現代中国の時代区分は、アヘン戦争(1840-2)からを近代とみなしている。この時代は中国にとって半植民地状態に陥つた苦難の時期である。開封のユダヤ人の状況も前近代とは全く異なつたものとなつてしまう。

道光 21 年(1841) 6 月に開封付近で決壊した黄河の水は、開封の城内にも流れ込み甚大な被害をあたえた。八ヶ月間にわたり水は引かなかつたという。近代という苦難の時代のはじめにこのようなことが起こつたことは偶然とばかりはいえない。洪水の防災、被災者の救済は王朝の役割であり、それがうまくゆかないことは清朝の衰退を表している。とりわけアヘン戦争の最中であり防災活動が停滞したと考えられる。この洪水を収め新たな治水工事を指揮したのは、アヘン戦争開戦の責任をとらされて、新疆に配流される途上にあつた林則徐であつたことも参考になる。官歴のなかで多くの水利事業を成功させていた水利の専門家だつた彼は特例として急遽治水工事を指揮することになつたのである。人々を励ましながら、ついに 1842 年 2 月、黄河の濁流を治めることに成功する。開封の付近の黄河堤防は現在でも「林公堤」と呼ばれている。

1850 年に英国聖公会によって二人の中国人キリスト教徒が開封に派遣された。彼らの報告は、100



1910年頃のシナゴグ遺址の様子。  
石碑だけになっている。  
建物があつたところは池となっている。〔White1966〕56頁



〔White1966〕より。開封ユダヤ人の女性達。  
1919年に撮影。漢族同様に纏足していたという。

年ぶりの開封情報であったが、その様変わりには驚かされる<sup>38)</sup>。まず、50年近くラビが不在になってしまっているため、ヘブライ文聖書を読めるものがいなくなっていた。信仰生活は危機に瀕していた。盛時数千人に及んでいた城内に住むユダヤ人の数は200人ほどで、郊外で農業を営むものがふえた。シナゴグは破損がひどく<sup>39)</sup>、しかも付近に住む人々が生活のため木材や煉瓦を売っていたという。『道経』（モーセ五書）は水浸しになっていたというので、洪水の被害がシナゴグ内部にまで及んだことが分かる。二人はここで、『道経』6部を400両で購入することになる。その後、13部あった『道経』を中心とする經典群は、訪れた欧米人に売られてし

まうのである<sup>40)</sup>。

現在、開封の城内にはいくつかの大きな沼沢があるが、これはこの時の積水の名残である。1866年に訪れたアメリカ人のマーチン牧師の証言では、その時点でシナゴグは荒廃しており、汚水池の畔に石碑が佇立していたという<sup>41)</sup>。シナゴグの用材だけではなく、土も販売の対象となって採掘され、水がたまり池になってしまっていた<sup>42)</sup>。1906年に開封を訪れた宇野哲人の見聞でも、シナゴグ跡が大きな池になっていたという<sup>43)</sup>。壮麗だった建物<sup>44)</sup>はこうして失われていった。第4の碑文も、後年、教経胡同の壁の中から発掘されている。

ところで、この洪水は、シナゴグ至近に位置する開封最大のモスク東大寺にも相当の被害を与えらした。回族共同体はそれをすぐさま復興している<sup>45)</sup>。この再建に、シナゴグの材料が用いられたという<sup>46)</sup>。この両者の違いはなにか。まず、回族の共同体は開封だけではなく、河南省全体に広く存在する。開封では、市民の10分の1に及ぶほどで、市内には13のモスクがある<sup>47)</sup>。現在も礼拝の場として宗教活動が行われており、門前にはイスラム食堂や菓子屋が軒を連ねているのである。1866年に開封を訪れたマーチン牧師によると、東大寺のイスラム法学者が、ユダヤ人が「不信心」であると批判していたと報告している<sup>48)</sup>。このことは今日までにつづく開封における両共同体の命運の乖離を示す証言として注目される。前近代においては開封の漢族たちはユダヤ人とムスリムをそれぞれ青帽回回、白帽回回と呼んで区別して意識していたようだ。ムスリムは中国ではコーランを漢訳するなど漢化していった。漢族からの改宗者も多くあり回族が形成される。一方のユダヤ人はモーセ五書を漢訳した形跡はなく、血によって守られる宗教共同体ゆえ、改宗者もほとんどなかったのであろう。逆にイスラムに改宗したユダヤ人も少なからずいたのである（〔馬梅霞2010〕）。

開封という都市にとってもこの洪水が起きた1840年代は大きな転換期だった。アヘン戦争により、欧米社会に開かれた上海など沿海部の都市が発達することになる。また、京漢線（京広鉄路）が鄭州を通ったことで（1906年開通）、交通の要衝としての地政的な役割を失い、開封の経済状況は振るわなくなった。開封のユダヤ人の共同体の崩壊は実にこのような世界史的な潮流と関係しているのである。

一方、上海の英国租界において、19世紀後半に多くのユダヤ人ビジネスマンが活躍するようになり、ユダヤ人社会が形成されている<sup>49)</sup>。彼らからの

開封ユダヤ人への救済の働きかけが行われ、開封ユダヤ人の若者を上海に呼び、ヘブライ語やユダヤ教信仰を教育するプランも実施されたが、継続的に行うまでには至らなかった。19世紀末のユダヤ世界は、ロシアで行われていたボグロムから避難するアシケナジーの群衆への対応に追われていた<sup>50</sup>。イギリスや上海に殺到するユダヤ難民の救援が大問題となっていたのである。一方で、すでに宗教的な習慣を失っており、漢人との混血も進んでいた開封のユダヤ人達には対しては、本格的な援助が行われることなく、中国は革命と動乱の時代を迎える。

戦前、何人かの日本人研究者が当時の開封に古蹟を訪ねているが、彼らもユダヤ人の住む街、教経胡同に注目している。宇野哲人は、明治39年(1906)に教経胡同を訪問している。宇野の旅行記によると<sup>51</sup>、訪問時、すでにシナゴグは存在せず、直径30間(約50m)ほどの池となっていて、ユダヤ人の子孫が洗濯をしていたという。池の畔には二つの石碑が立っていた。それが、表裏一体の①弘治碑②正徳碑であり、もう一つが、④の石碑である。宇野の目には、ユダヤ人の子孫の容貌は漢人との混血により区別できなかったという。服装も中国人と同じものだった。明治41年(1908)には、桑原隲蔵が開封を訪問している。『考古遊記』には教経胡同訪問と短い考証が記述されている<sup>52</sup>。そこには①弘治碑②正徳碑の両面碑の一本しかなかったと記録されている。④は碑文が摩耗していたために、無価値とされ、建設材料として使われてしまったのである<sup>53</sup>。日中戦争直前にも濱一衛が開封を訪れているが、彼は街で教経胡同のことを聞き車窓から見物している<sup>54</sup>。戦争中、開封は日本軍によって占領されている(1938年6月から1945年8月)<sup>55</sup>。そのときに、曾我部静雄ら二人の研究者が開封のユダヤ人の調査を行っている<sup>56</sup>。

1914年、シナゴグの建っていた土地は猶太人末裔によって、カナダ聖公会に売却される。大戦前はそこに聖堂(三一教堂<sup>57</sup> トリニティチャーチ)が建っていたが、1938年6月に日本軍の攻撃によって聖堂は破壊されてしまう。現在はその跡地に、人民第四病院が建っている。日中戦争開始直前まで、カナダ聖公会の開封駐在の司教として24年にわたって開封に滞在していたウィリアム・C・ホワイト師は開封においてユダヤ人の研究をつづけ、関連資料を収集している。1922年には土地と共に売却されていた2枚の石碑を購入しカナダに運びだそうとしたが、ナショナリズムの発展に伴う、文化財の国外流出に対する反対運動が開封で発生する<sup>58</sup>。ホワイ

ト師は断念し、教会堂の敷地内に安置し省外には持ち出さないことに同意したという。現在は両碑は市立博物館の所蔵となっている。帰国後、トロントにある王立オンタリオ博物館の東洋部門の責任者となったホワイト師は、ユダヤ人についての浩瀚な研究書を発表しており、開封ユダヤ人研究の基本文献となっている<sup>59</sup>。また、モーセ五経を安置する容器(経龕)を中心として(すでにヘブライ文の『旧約聖書』は既に1部も存在していなかった。)、多くの文物をカナダに持ち帰っており、王立オンタリオ博物館で展示されている。其中には弘治碑・正徳碑のレプリカもある。これにより開封には碑文とわずかに残ったユダヤ人末裔の人々をのぞきユダヤ人関係の資料はなくなってしまったのである。

### おわりに—今日の猶太人末裔について

近代になり、多くの海外からの開封訪問者は、彼らを「ユダヤ人」と呼んだ。彼ら自身もそれまでの自称や他称にかわって「猶太人」と称するようになった。「猶太人」という呼称は近代(道光年間以降)にはじまるのである<sup>60</sup>。

新中国の成立以降、彼らはどうなったのか。現在の中国では少数民族を公認し少数民族の自治が行われている。開封のシナゴグの地は現在は開封市の順河回族自治区に属している。ユダヤ人は以前は自分で「猶太人」という少数民族として戸籍登録をしていたようである。1952年に北京で開かれた国慶節の行事に少数民族代表として2名が参加したが、翌年定められた55の少数民族の一つとして認められなかった([小岸2007]231頁)。その後は、漢族か回族を選んで戸籍登録するように求められている。

それ以前に、イスラム教徒(回族)として生活するようになったり、漢族として生活するようになった人々も多い<sup>61</sup>。開封から離れた人々<sup>62</sup>の中には、すでに自分たちが猶太人の子孫であるという意識がないものも多いという<sup>63</sup>。

イスラエルが建国されたことで、世界中のディアスポラのユダヤ人に「帰国」する機会が生じた。開封のユダヤ人の一 가족が、フィンランド経由でイスラエルに(中国では)非合法に移住したことも知られている<sup>64</sup>。その後、イスラエルの救済団体から開封の猶太人に対してコンタクトがあり、数人の開封ユダヤ人がイスラエルに留学し語学と宗教を学んでいる。法制上、イスラエルでは母系の子孫を猶太人と認定する。開封では父系の一族として共同体の構



成員が形成されてきた。したがって、イスラエルの法律上はユダヤ人として認められない。ユダヤ人として認められるためには、宗教と言語の壁を乗り越えて、ラビから認められることが必要なのだという<sup>65)</sup>。

開封にいる猶太人の末裔達も宗教的伝統と共同体そしてシナゴグを回復することを希望しているようである。近年はユダヤ人の団体が復興したことが報じられた<sup>66)</sup>。問題は、現在の中国で宗教的な締め付けが厳しくなっていることである。政府公認<sup>67)</sup>の五大宗教ですら、迫害ともいえるような事案が発生している。それにも属していないユダヤ教は、現在の中国政府の公式見解では、宗教ではない。公的には、猶太人という少数民族も存在していない。猶太人末裔を自称するものがあるだけである。

私は昨年夏に開封を訪問し、開封の城壁発掘現場の取材をする傍ら猶太人についての調査を試みた。発掘現場の人々に猶太人について教えてほしいという、この問題は現在中国では非常に「敏感」な問題となっていると告げられた。その現れとして、開封市博物館の状況がある。数年前には見学可能であった開封市博物館の四階のユダヤ人陳列室は閉鎖されており、保管されている石碑二枚を現在見学することすらできない。その存在を隠しているのである。一方では、三階で開封とは関係があるとは思えない、文革期に人海戦術によって完成した河南省北

部の紅旗渠をテーマとした写真展が行われていた。

南教経胡同を訪ねた。そこは、経済発展する中国から取り残されたような、伝統的な民家が建ち並ぶ一角であった。注意深く伺ってみると、確かにシオンの星がついた民家にたどり着いた。壁には、「猶太教清真寺遺址」の看板がかすかに見える。かつてシナゴグが立っていた一角なのである。そこに住む女性はユダヤ人の末裔であると自己紹介した。彼女は趙一族の子孫である。趙氏は宋朝皇帝の姓を賜った一族である。彼女は我々のような海外からの訪問者に開封猶太人の歴史文化を解説したり資料やお土産物などを販売することによって生活しているようだ。一日に数人が訪れるという。ただし、以前あった大きな看板は撤去されており、現地では「敏感」な問題となっている猶太人末裔の方々の境遇が伺われた。

## 註

- 1) [趙冲等 2015]
- 2) 汴河にかわり、元末に開鑿された賈魯河が黄河の本流となり淮河に通じ交通路として重要となった [蔡泰彬 1992] 68 頁。
- 3) [濱 2010] 190 頁。濱氏が中日戦争直前に開封を訪れ、そこで演劇関係の資料を収集している様が記録されているが、開封でこの時期も地方劇が盛んだった様が了解される貴重な記録となっている。
- 4) スタインとペリオによって西域で唐代のヘブライ語文書が発見されている ([魏千志 1993] 24-5 頁)。また、『シナ・インド物語 第 2 巻』藤本勝次譯註、関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 1、1976、33 頁には「シーラーフの人、アブー・ザイド・アル・ハサンは次のように語った。…この町に住みつき商業を営んでいたイスラーム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒、合わせて 12 万人を彼(黄巢)は虐殺したとのことである。」とあり、唐末、「この町」(ハーンフー=広州)に、ユダヤ教徒の商人が多数滞在していたことが記されている。
- 5) 「重建清真寺記」(弘治碑)の録文は [李景文等 2011] 21 頁に拠った。
- 6) [李景文等 2011] 3 頁。
- 7) 『宋史』巻 6、真宗紀、咸平元年(998)春正月辛巳、中華書局 1977、107 頁：僧你尾尼等自西天来朝、称七年始達。
- 8) 『東京夢華録』巻 3、世界書局 1973、84-5 頁によると、祆廟は唐代から開封にあったものだという。なお、明末清初の無名氏(孔憲易校注)『如夢録』中州古籍出版社 1984、47 頁の「挑筋教礼拝寺」の

清人注には、「在今曹門内火神廟南。」とあるが、『墨莊漫録』巻4、中華書局2002、110頁によると、開封ではアフラマズダは火神と呼ばれていたという。

9) [陳垣1920] 84頁, [孔憲易1985] 254-255頁.

10) 『元典章』新集, 戸部, 賦役, 差発, 回回当差納包銀, 中華書局2011, 2113頁に「竹忽」という言葉があり, [船田2000] 36頁では, 「ジョーフード」とルビが振られ【】書きで「ユダヤ教士」と説明されている. また, 元朝における色目人の問題については[船田1999]に詳論されているが, ユダヤ人については言及がない.

11) [陳垣1920] 84-5頁ならびに[李景文等2011] 4-6頁によると, 金元の正史にJewの音訳と見られる史料が頻出している.

12) 李濂(正徳9年(1514)の進士)が選した『汴京遺蹟志』には記述が見当たらない. 前掲の『如夢録』47頁には, 「挑筋教礼拝寺」があることが記されている. この項に対し清末の常茂徠(1788-1873)は, 「寺今漸<sup>しだい</sup>廢」とする. これは清末の礼拝寺の状況を目撃した上での発言であろう.

13) [リッチ1983]. リッチを訪ねた会試受験生は艾田と名乗った.

14) イエズス会士の名前と開封訪問年代は, [小岸2007]による.

15) [リッチ1983] 35頁

16) [リッチ1983] 33頁ならびに「重建清真寺記」[李景文等2011] 20頁による.

17) [張礼剛2008] 398頁

18) [李景文等2011] 21頁

19) 清代のものは, 現在, カナダのロイヤル・オンタリオ博物館が所蔵している.

20) 積文は[李景文等2011]を参照. 行方不明の碑文は, ジャン・パウル・ゴザニが拓本をローマのイエズス会本部に送っていたことから, 現在にテキストは伝来している([White1942] II-57頁.) 78-79頁に拓本の写真が掲載されている.

21) 弘治碑と正徳碑は, 裏表に結び付けられ, まるで一枚の石碑の裏表に刻まれたような様態となって展示されている.

22) 土市子とは, 土地の名産品が商われていたことに由来する地名であろう. 『東京夢華録』巻2, 世界書局1971, 73頁. 現在は土街という道路名に受け継がれている. 『如夢録』5頁の孔憲易注には, 「土街は土市子の簡称である. 弘治碑には, 土市子街という称している. 土街の称は金元に始まる」とある.

23) [孔憲易1985] 258頁に考証がある.

24) 『夢華録』巻3, 71頁: 自土市子南去, 鐵屑樓

酒店.

25) 『大元至元辨偽録』巻3, 元刻本影印, 北京図書館古籍珍本叢刊77 子部積家類 『仏祖歴代通載』外, 書目文獻出版社, 516頁

26) [桑原隲蔵1968] 386頁には, 「ネストル教は, 支那で普通に景教と稱せられたが, 又ミシア(Missiah 救世主の意味)教とも稱せられた. 支那の記録にはミシアといふ言葉に, 彌尸訶(『貞元新定釋教目録]), 彌施訶(大秦景教流行中國碑)または彌失訶(『佛祖歴代通載])などの漢字を充てて居る.」とある.

27) [孔憲易1985] 256-9頁に考察によったが, 『大元至元辨偽録』の一節の検討や, 桑原説の引用は, 本論が補うところである.

28) [趙冲等2015] 778-9頁, 「2学院門社区の概要」を参照. この論文はこの市区(学院門社区)の住宅建築についての調査報告であり, 対象地区は土市子, 教経胡同などを包含している.

29) [陳垣1920] 84-85に猶太人改姓について考察がある.

30) [江文漢1982] 164頁を参照.

31) [リッチ1983] 33頁

32) 金とは, 弘治碑にある17姓の一つである. [江文漢1982] 182頁も参照.

33) [久保田2014]

34) [張倩紅2007] 317頁に, 明代のユダヤ人土大夫の名表を参照.

35) [リッチ1983] 35頁

36) ミンヤン(ミニヤーン)という定数. 10名以上の男性信者の参加が宗教行事の前提となる. [小岸2007] 260頁

37) [張倩紅2007] 308-327頁

38) [江文漢1982] 164頁.

39) 『如夢録』47頁「挑筋教礼拝寺」の注には, 「寺今漸廢」とある. この注は開封の人常茂徠が記したものである. 彼は1852年に序を書いているので, この時期の状況を示したものと見える. [徐伯勇2001] 61頁. ただし, 1850年に開封シナゴグを探訪した二人の英国聖公会の記録(Londeon society for pormoting christeanity among the jews"The Jews at K'ae fun-foo" The Longdon missinonary society's press 1851)によると, シナゴグの建物自体はまだ立っていた. ただし, 木材が高武生というユダヤ共同体の成員の一人によって売られたことや, 外来の探訪者に対する一部のユダヤ人の警戒なども暗示されている. これは, ユダヤ人集団が一枚岩でなく, 伝統を守ろうとするものと,

経済的に困窮し經典や建物を販売しようとするものの対立があったことを分かる。〔陳垣1920〕105頁では、咸豊10（1860）年の再度の洪水により、シナゴグは完全に破壊されたことが推測されている。同治6（1867）年、開封を訪れたアメリカ人の記録では、シナゴグは完全に存在せず、跡地には、碑文2本が佇立していたという。

40) 〔江文漢 1982〕183頁以下にはトローラー売却、海外流出の歴史が詳しい。1851年ロンドン協会の使者2人は、『五經』6巻を購入した（大英博物館、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、アメリカダラスの南メソジスト大学に一部ずつ。残りの1部は香港で行方不明となる。）1866年アメリカ人マーチン牧師は、『五經』2部を入手（〔江文漢 1982〕166頁によると、「騙し取った」）している（ニューヨークのアメリカ聖教公会とアメリカユダヤ神学院に1部ずつ。）1870年ごろ、オーストリア公使某がウィーンの国家図書館に1巻を寄贈。1908に上海天主教江南教区が、400両で1部を購入。これで開封には経巻はなくなる。外国人が買ったのは10部で、残りの3部は行方不明（〔江文漢 1982〕184頁）だという。開封トローラーのことについては、〔野口2010〕58頁も参照。

41) 〔江文漢 1982〕166頁。

42) 〔徐伯勇 2001〕61頁

43) 〔宇野 2006〕167頁

44) 〔徐伯勇 2001〕57頁によると、最も大きな大殿は、三間で、14×24メートルの大きさであったという。

45) 〔胡云生1990〕394頁

46) 現在東大寺には、いくつかのシナゴグの遺品が所蔵されている。

47) 〔胡云生1990〕373頁

48) 〔野口 2010〕52頁。この時期のユダヤ人は割礼を行わず、過ぎ越の祭りなどの祝祭も覚えてはいるが実施しなくなっていた。マーティンは、彼らの不信心を利用して二部の道経を手に入れている。〔江文漢 1982〕166頁による。

49) 1900年、中国ユダヤ人救済協会が上海において設立された。四年間活動したが、資金不足のため、20年の休眠状態となる。1924年に再開されるが開封の状況は絶望的であったという。〔丸山 1991〕97-9頁。〔丸山 2005〕23-4頁。

50) 〔野口 2010〕54-6頁

51) 〔宇野 2006〕167頁

52) 〔桑原 2001〕281頁。

53) 〔江文漢 1982〕169頁

54) 〔濱 2010〕190頁

55) 占領の状況については〔丸山 1991〕100頁を参照。

56) 〔曾我部 1941〕〔三上 1941〕

57) 〔張倩紅1998〕332頁

58) 〔孔憲易1985〕243頁以降に、この際に論陣を張った時経訓の事績が詳述されている。

59) 〔White 1966〕。初版はトロント大学出版局から1942年刊行されている。

60) 〔陳垣1981〕85頁。〔潘光旦1983〕。

61) 〔潘光旦1983〕160頁。

62) 中国の14の省や直轄市で、開封から移住した猶太人の痕跡があるという。〔馬梅霞 2010〕32頁。〔潘光旦1983〕によると、洛陽、敦煌、広州、広州、激浦、寧波、北京、泉州、寧夏、揚州、南京にユダヤ人が定住した可能性があるとしている。

63) 〔馬梅霞 2010〕24頁。北京や杭州の猶太人は早い内にイスラム教徒となっているそうだ。

64) 〔小岸 2007〕241頁

65) 〔馬梅霞 2010〕26頁

66) 〔小岸 2007〕257頁には、2006年に小岸氏が直接開封で得た情報が報告されている。ヘブライ語学習や宗教行事をおこなう数十人の集まりが形成されているという。

67) 中華人民共和国の宗教管理政策については、〔川田 2015〕参照。

## 参考文献

- 宇野哲人 2006 『清国文明記』講談社学術文庫。原題『支那文明記』大同館 1912
- 川田 進 2015 『東チベットの宗教空間：中国共産党の宗教政策と社会変容』北海道大学出版会
- 久保田和男 2014 「開封廢都と臨安定都をめぐって」新宮学編『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社
- 桑原隲藏 2001 「山東河南地方遊歴報告書」『考古遊記』岩波文庫所収。弘文堂書房が1942に発行したものを復刻。
- 桑原隲藏 1968 「大秦景教流行中國碑に就いて」『桑原隲藏全集 第一卷 東洋史說苑』岩波書店 1968（昭和43）年
- 小岸昭 2007 『中国・開封のユダヤ人』人文書院
- 曾我部静雄 1941 「開封の猶太人」『外交時報』869号。
- 趙冲等 2015 「学院門社区（開封旧内城）の住居類型とその変容に関する考察」『日本建築学会 計画系論文集』80(710)
- 丸山直起 1991 「開封ユダヤ人社会の滅亡」『国際大

学中东研究所紀要』第5号  
 丸山直起 2005 『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』  
 法政大学出版局  
 三上諦聴 1941 「開封猶太教徒の現状報告」『支那  
 仏教史学』巻5.  
 野口崇子 2010 「19世紀英国ユダヤ人社会——開  
 封ユダヤ人共同体の救援をめぐる」『ナマール』  
 第15号  
 濱一衛 2010 「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」『言  
 語文化論究』25  
 船田 善之 1999 「元朝治下の色目人について」『史  
 学雑誌』第108編第9号  
 船田 善之 2000 「元代の戸籍制度における色目人」  
 『史観』第143冊

蔡泰彬 明代草和支整治與管理 臺灣商務印書館 1992  
 陳垣 1920 「開封一賜樂業教考」『東方雜誌』第17  
 卷第5/6/7号, のち『陳垣史学論著選』上海人民出  
 版社 1981, 再録. 頁数は後者による.  
 江文漢 1982 『中國古代基督教及開封猶太人』知  
 識出版社  
 胡云生 1990 「開封市伊斯兰教清真寺」『開封文史  
 資料』1990年第十輯, 『開封回族』民族出版社 2014,  
 再録. 頁数は後者による.  
 孔憲易 1985 「開封一次樂業教鈎沉」『上海師範大  
 学学報』1985年第三期, 『世界宗教資料』1986第2  
 期, 第4期. 後に, [李景文等 2011] に転載. ページ  
 数はこれによる.  
 馬梅霞 2010 「対原開封猶太人“融回”人員の人類学  
 調査」西北民族大学 中国优秀硕士学位论文全文  
 全文数据库より.  
 甘汝誠 2001 「開封猶太會堂卷軸的研究」建道神  
 学院「基督教與中國文化研究中心通讯」第二十四期  
 潘光旦 1983 『中國境内猶太人的若干歷史問題』  
 北京大学出版社  
 徐伯勇 2001 「開封猶太教清真寺考述」『開封研究』  
 中州古籍出版, 所収.  
 魏千志 1993 「中国猶太人定居開封時間考」『史学  
 月刊』1993年第5期.  
 張倩紅 2007 「从猶太教到儒教: 開封猶太人同化

的内在因素之研究」『世界宗教研究』2007年第1期,  
 後に, [李景文等 2011] に転載. ページ数はこれに  
 による.

張倩紅 1998 「历史上的開封一次樂業教清真寺」『二  
 十一世紀』1998年10月号第49期, 後に, [李景文  
 等 2011] に転載. ページ数はこれによる.

張礼剛 2008 「近代中国知識界对古代開封猶太人  
 身份的理解」『学海』2008年第3期, 後に, [李景  
 文等 2011] に転載. ページ数はこれによる.

李景文等 2009 『古代開封猶太人 中文文献輯要  
 与研究』人民出版社, 2009・・・この本には上記の  
 中国文献の多くが再掲されていて便利である.

White 1966 "Chinese Jews" second edition University  
 of Toronto Press

Michael Pollak 1975 "The Torah Scrolls of the Chinese  
 Jews" Bindwell Library, Southern Methodist University  
 Dallas Texas

London society for promoting christianity  
 among the jews 1851 "The Jews at K'ae  
 fung-foo" The London missionary society's  
 press

マッテオ=リッチ 1983 『イエズス会によるキリス  
 ト教のチーナ布教について』川名公平等訳『中国キ  
 リスト教布教史 二』岩波書店 1983, 所収.

#### (附記)

・本稿は, 「2015年度 早稲田大学史学会全体会  
 公開シンポジウム「世界史のなかのユダヤ人」」に  
 おける発表原稿を大幅に改稿したものである. 早稲  
 田大学近藤一成教授からは報告の貴重な機会を賜っ  
 た. また報告の際は, 多くの方から貴重な御意見を  
 頂戴した. この場を借りて深謝したい.

・資料収集においてご協力いただいた, 河南大学の  
 劉春迎教授, 開封市在住の郭研さん, また長野工業  
 高等専門学校図書館の皆様は心より御礼を申し上げ  
 たい.

・本稿は, 2015年度日本学術振興会の科学研究費  
 補助金(基盤研究C)による研究成果の一部である.